

# ふるさと再見

## 第一部 猿橋物語

<7>

男市長が設計の基礎資料に頼った。採用したとはいえ、まあでもな

「欄干があつて、大事なものが入ってます。火事の時、たわかが持ち出したのでしょが、それが「んん形」でお役に立つとは……」と近所の奈良寺さん。月、猿橋一帯が大火に見舞われ、奈良家の大きな店や倉庫も焼け落ちたが、この出来形は

清水四年（一八五二）の出来形から、当時の猿橋架け替えの模様を多少紹介してみよう。

工事は嘉永三年十一月中旬に始まり、翌四年四月に完成している。渡架を修え、田植などにかかるまでの農閑期、清水惣を利用したが、工期わずか五か月、大変な急務工事といえる。

橋に使われた木材はケヤキ、杉、クリ材で、大小四百九十本。橋を支える柱（はね柱）は片側が七十四段、三並の八本。長さ六間半（十二間弱）から九間（十六材強）まで、いくほや長い。いずれも二尺八寸（約五十四センチ）角。柱と柱の間、中央の橋桁（け）は三本、一番大きいものは長さ九間、二尺（約六十センチ）角という巨木だった。

これらの木材は、小金沢山（現在の大月市深城村近）と鹿沼山（総務市鹿沼付近）の入金地から切り出された。

### 架け替えの記録

「御書場より瀬戸村百姓入 念山字小泉まで 往來二十四里、一日六里歩行」(出来形)。この里は昔の単位で、換算すれば片道約八里、それを二日かけて運び出したことなる。道作り、運搬などで動員された人足は、賽に延べ六万三千人を数えた。

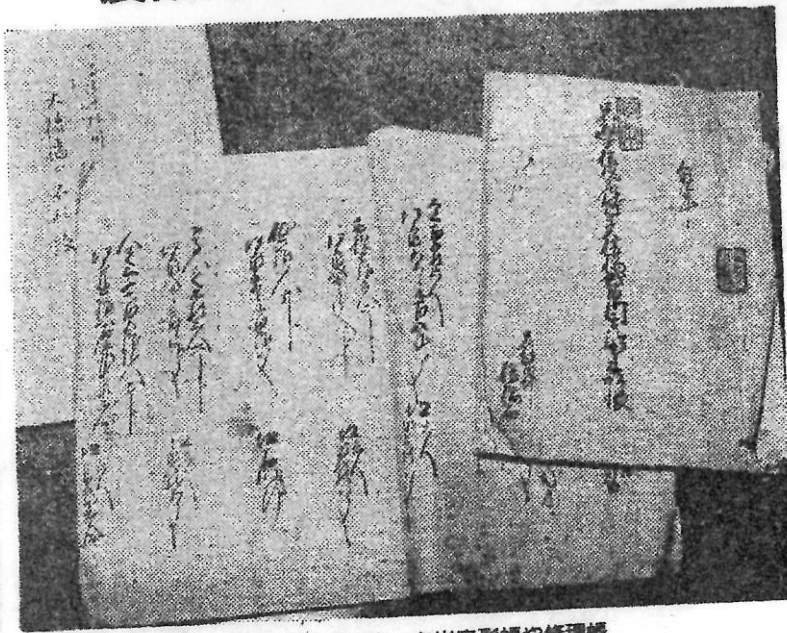
当時、人足には雇われた賃米（ちんまい）(人足)と、近在から狩り出された「職務人足」があり、一日の賃金は前者が一斗米一升七合(約一・五斗)、後者が同七合五勺(約一・一斗)だった。

甲州街道は江戸五街道の一つ。要路の橋架け替えだけに幕府が大身令をかけたことは想像にかたくないが、のちに賃金を払いで村方が怒り、訴訟争たことになる。世にいう猿橋騒動と呼ばれるトラブル。解決したのは明らかでなかつた。

この嘉永四年の出来形欄干(現在の鹿沼市鹿沼付近)の架け替えの一部始終を著した記録はない。今回

## 嘉永に突貫工事

### 農閑期を利用、6万人動員



奈良家から見つかった出来形欄干や修理帳